

【特集】

一四世紀京都の政治と社会―祇園社「社家記録」を読む―

特集にあたって

三 枝 暁 子

本特集は、二〇一〇年～二〇一二年度の文学研究科日本史学専修の大学院授業「日本史特殊問題」における成果をもとに、まとめたものである。本授業においては、南北朝動乱期京都の政治・社会を知るうえで欠かせぬ史料といえる、祇園社「社家記録」（通称「祇園執行日記」）を取り上げ、輪読を行った。

「社家記録」は、祇園社すなわち現在の八坂神社に所蔵されている、祇園社僧頭詮の日記（自筆本）である。現在、康永二年（二三四三）七月～十二月条、貞和六年（一三五〇）正月～観応元年十二月条、正平七年（二二五二）正月～十二月条、応安四年（二三七二）七月～十月条、応安五年（二三七二）七月～十二月条が、八坂神社社務所編『八坂神社記録』上、『増補統史料大成 八坂神社記録』（全五巻）として公刊されている。このうち、本授業においては、記主である社僧頭詮が、祇園社経営の中心を担う「執行職」の地位にあった正平七年の日記を取り上げ、正月条から順次輪読を進めていった。輪読に際しては、刊本史料を原本写真と照合のうえ読み下し、解釈し、論点を提示して分析し、議論をする、ということを行った（二〇一三年度も輪読を続けており、現在、七月条まで読み終えている）。

特に正平七年条を取り上げた理由として、①正平七年という年が、南朝方の京都奪還に対し幕府が巻き返しをはかる、政治上の変動期にあつたこと、②このような政治動向に対し、記主頭詮が祇園社執行

職としてみせた対応のなかに、当該期の祇園社組織・経営の実態や、祇園社の本寺比叡山延暦寺の動向がみえること、の二点がある。このうち②の点については、もともと授業担当者が関心を寄せ、追究してきた問題であったが、授業において議論を重ねるなかで、組織のあり方や文書保管の分析などの点で、研究に不備や誤りのあることが明らかとなった。また、記主頭詮の正平七年の動向は、幕府や天台座主など上位権力の関係をぬきにして語れないものであり、①と②とは、決して切り離して考えるべき問題ではないことも確認することができた。さらに、授業参加者の研究分野が、政治史・経済史・宗教史・文化史そして文学等々多岐にわたるなか、神供や法会、居住空間など、当該期の社会を読み解く視角が様々に存在しうることに、改めて思い至った。

このように、祇園社「社家記録」が思いのほか豊かな情報をもつ史料であることを再認識することができたのは、授業参加者が授業時の報告及びレポートにおいて練り広げた説得力ある問題提起や論点の提示、それらに対する検討・分析の力によるところが大きい。こうした参加者の成果は、今後の南北朝期の政治・社会に関する研究の進展に、何らかのかたちで寄与しうるのではないかとの思いが日ごとに強くなり、本特集を編むことを決意した。

最後に、二〇一〇～二〇一二年度までの、授業参加者を提示しておく（五十音順、単年度・複数年度参加含む）。本特集の掲載論文は、いずれも左記メンバーによる議論によって生まれ、鍛え上げられたものであることを付言しておく。

池坊 由紀、池松 直樹、大坪 舞、小川 拓郎、酒井 友康、酒匂 由紀子、杉谷 理沙、鈴木 耕太郎、田中 誠、辻 浩和、中尾 芙貴子、中村 明、花田 卓司、吉永 隆記

（本学文学部准教授）